

「元気いっぱい・笑顔いっぱい」

特別支援教育統括コーディネーター 加賀谷 勝

「指導言を意識して話そう」

授業中、教師の話を聞かずに手遊びをしている子ども、勝手に作業を始めてしまう子ども、上の空で聞いている子どもなどを見掛けることがあります。指導言を意識して、バランスよく組み合わせることで、子どもに伝わる授業が展開できます。

【教師の話が子どもに伝わっていない理由】

- ①話す内容が難しく、長い。
- ②教師が子どもの反応を待てずに、つい言葉を掛けてしまう。
- ③**指導言**（授業において教師が子どもに向かって発する言葉）の使い方ができていない。
- ④子どもに伝えたいという思いが強すぎて、大きな声で話している



【指導言とは】

指導言には、「発問」「説明」「指示」があり、それらを意図的に使い分ける。

「発問」～子どもの考えを導き出すために教師が問い掛けるもので、対話や集団思考につながる（子どもの思考に働き掛ける）。

例：「主人公はどんな性格でしょうか。どうしてそう思ったのですか」

「説明」～子どもの思考にも行動にも働き掛けるもの（「発問」「指示」のもととなる）。

例：「登場人物の性格を考えるには、その人物の行動や言葉を結び付けて想像することが大切です」

「指示」～子どもにしてほしい行動、活動、作業を伝えるためのもの（子どもの行動に働き掛けるので、一番ダイレクトに作用する）。

例：「登場人物の相関図を書きましょう」

【効果的な指導言の使い方】

- ①「発問」「説明」「指示」をする前
 - ・学習活動を一端止め、子どもが集中できていることを確かめてから話す。
- ②「発問」「説明」「指示」をしているとき
 - ・発問を言い換えたり、違う発問を重ねたりしない。
 - ・同じ方向ばかり見ないで、子ども全体を見渡しながら話す。
- ③発問や指示の後
 - ・内容で分からないことがないか、子どもたちの表情を見て確認する。
 - ・挙手している子どもがいても、全ての子どもに考え判断できる時間を与えるため、少し間をおいてから指名する。
- ④子どもの発言を聞くとき
 - ・頷いたり、相槌を打ったりして、受容的に聞く。
 - ・子どもの発言を否定せず、子どもたち同士で考えさせるようにする。
 - ・教師が答えを言ったり、子どもの発言を最後まで聞かずに言葉を補ったりしない。



授業は、子どもに向けられた指導言によって方向付けられ、思考スイッチがオンになります。子どもの反応を参考に、より効果的な指導言となるように心掛けましょう。



とれたて直送便



合い言葉は、「とまと」

ある園の交通安全教室で、交通指導員さんが道路や横断歩道の渡り方を園児に説明する際、**とまと**のイラストを見せながら、「**とまる**」「**まつ**」「**とびださない**」と、分かりやすく説明していました。**真っ赤なとまと**はおいしいけれど、**真っ赤な信号**は危ないよ！